

Japan Adult Leukemia Study Group

JALSG

Newsletter No.1

April 2012

目次

大野理事長からのご挨拶 :JALSG ニュース発刊によせて
 直江代表からのご挨拶 :JALSG 創立 25 周年にあたって
 JALSG 新規構図、JALSG 代表、幹事の選定方法と経過
 施設紹介 : 藤田保健衛生大学
 25 周年記念国際シンポジウムについて

JALSG ニュースレター発刊によせて

特定非営利活動法人 成人白血病治療共同研究支援機構 理事長

愛知県がんセンター名誉総長

大野 竜三

設立 25 周年を経てニュースレターが発刊されることになったこと、ご同慶の至りと感じると同時に、月日の移ろいに感慨深いものがある。

1987 年 4 月朝長万左男・大島年照先生らと共に設立した JALSG は、当初はたったの 14 施設。運営委員が現在の幹事に該当し、全員参加の定例総会が最高決定機関だった。現在、194 施設・213 病院の大組織となり、ニュースレターがないと意思の疎通ができないようになったのは当然の成り行きだろう。

先日 2011 年の貿易収支が 31 年ぶりに赤字になったことが報告された。大戦後の荒廃から回復して貿易収支が黒字になったのが 1980 年。当時の為替レートは 1 ドル約 250 円。優秀な日本製品の対米輸出を抑えるために円高にシフトさせる先進 5 カ国によるプラザ合意がされたのが 85 年。日本は経済大国の仲間入りを果たしたが、医学界はそうではなかった。

日本製品も私が MD Anderson CC に留学していた 60 年代後半は、ソニーのトランジスタラジオなどは別として、「安かろう悪かろう」の時代であり、人気コメディ番組 Jackie Gleason Show で、巨漢の彼が自転車に乗っていて、たまたまこれが壊れたりすると、両手を広げ「Oh! No! This is made-in-Japan!」と肩をすくめれば、ドット笑いが入ったものだ。

1987 年は、日米英仏西独の G5 ではけしからんとイタリアが参加を要求し、同国とカナダが加わった G7 が開かれた年だったが、同年 2 月にローマで開催された国際白血病シンポジウムの折には、もしその年に主要国白血病会議が開かれたとしたら、日本は G5 には絶対ダメ、G7 も無理だろうというのが出席していた我々の実感だった。そんな情勢の中、世界に追いつくことを目指して設立した JALSG であったが、小規模グループのため、小回りが効き動きも早かった。GCP が本格導入されたのは 90 年代後半だから、患者さんの IC を得ればよく、IRB はなかった頃だ。今では信じられないことであろうが、90 年から開始した ATRA 治療は上海の王教授からの基礎データなしの提供品であり、100 余例で驚異の有効性を確認した。92 年からの APL92 study では、Hoffman La Roche 社製 ATRA を使ったが、私が個人輸入し、症例登録があると配送していた。この初発 APL に対する世界初の多施設共同前方向研究は 95 年に Blood に掲載され、JALSG が中心となって実施し 90 年に N Engl J Med に掲載された AML に対する G-CSF study と共に、日本に JALSG ありと世界に知られるようになった。その後日本ロシュが ATRA の治験を行い、94 年に先進国では最初に承認され、患者さんに多大な貢献をしたのは APL92 のためと自負



している。

現在だったらどうだろう。まず、今の JALSG プロトコル審査委員会なら承認してくれないかもしれないし、してくれても半年～1年以上はかかるだろう。そして、画期的な効果を示し、多くの命を救ったのを歴史が証明した ATRA でも、欧米未認可の薬とあれば承認しない IRB も多いだろう。中国発の亜砒酸は浜松医大の IRB 承認に2年以上を要し、米国の study が N Engl J Med に掲載されたのを見て承認された。JALSG も建前ばかりにとらわれることなく、世界の動静を見据えつつ臨機応変でスピーディな研究推進を願ってやまない。

JALSG 創立 25 周年にあたって

JALSG 代表 直江知樹

言うまでもないが、JALSG は世界トップレベルの白血病治療エビデンスを発信し、白血病患者の生存と QOL 向上を図ることを目的とした研究グループである。白血病は“がん”のなかで罹患率が低いうえに病型や治療法が細分化している。その上、患者の高齢化などの要因によって、元々少ない一施設あたりのプロトコル登録症例数はさらに減少傾向にある。数年前から、韓国・中国では単一施設で日本の多施設共同研究に匹敵する症例数を報告し始めている。検体を用いたゲノム研究については欧米のみならずアジアでも進んでおり、JALSG はこれまで以上にネットワーク強化を図る必要性を増している。



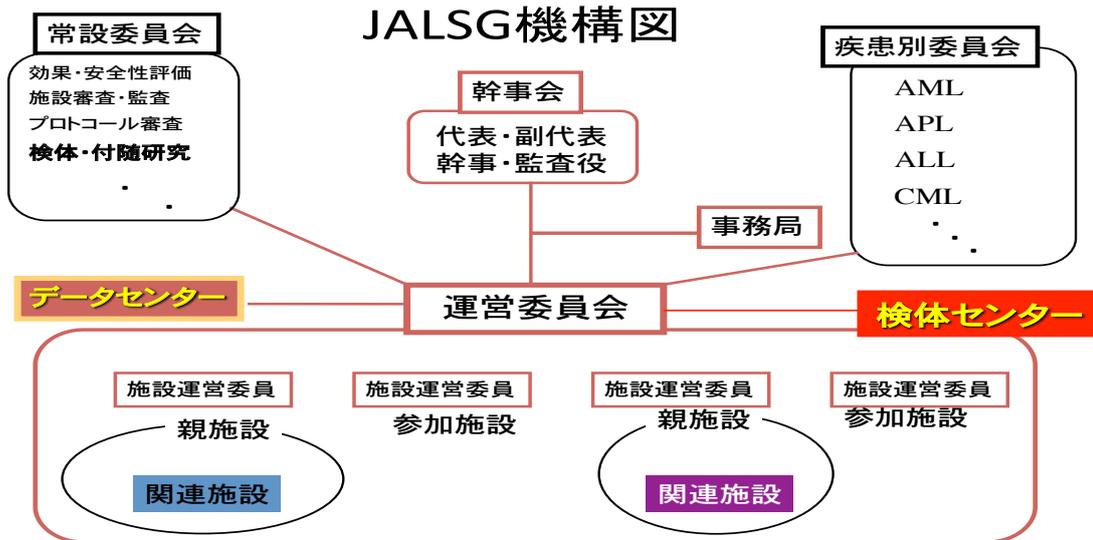
JALSG は 1987 年発足当時から、白血病治療に熱心な臨床医が自発的に集まり、“手弁当”で運営に当たってきた。各施設から診療の実務者が出席する運営委員会や関係者が一堂に会する定例会議ですべての問題が話し合わせ、そこで激論となることもしばしばあった。施設数の増加にともない、2005 年よりその組織が改められた。現在では幹事会、運営委員会、常設委員会、疾患別委員会、さらにデータセンターや検体センターが設けられている。

代表としての苦勞の一つは安定した資金の確保である。わずかな入会金と年会費のみで事務局機能を維持することは不可能である。厚労省がん研究助成金（現在の国立がん研究センター研究開発費）に加えて 2004 年から厚労省がん臨床研究事業費が増え、今年度からは次世代がん研究戦略推進プロジェクトがゲノム研究推進目的で追加された。とはいえ JALSG 研究は多くの場合、プロトコル立案から論文掲載まで 10 年は要する。年単位の研究費では JALSG 活動を支えるには不十分かつ不安定である。そのため 2006 年に JALSG を始め白血病臨床研究を支援する目的で設立された NPO はなくてはならない存在となっている。

JALSG が創立された頃、日本の成績が国際一流ジャーナルを通して発信され、海外での総説やメタアナリシにも引用されるなどということは皆無であった。現在の JALSG の活躍ぶりは、日本の白血病臨床医に勇気と自信を与えていると思う。しかし組織の拡大は様々な問題も含んでいる。JALSG が今後とも世界の臨床研究の一翼を担わんとすれば、①さらなるインフラ整備、②研究遂行の迅速化、③研究の質の向上、④広報と教育による意識改革、⑤若手の登用と活躍、が欠かせない。新たな四半世紀に向かって挑戦しよう！

JALSG ニュースレターは、グループ施設の運営委員、スタッフの医師の方へ役に立つ情報を伝えたいと思っています。

- 1 役に立つ HP, チェックをしている製薬会社の HP を紹介ください。
- 2 グループ施設に聞いてみたいこと、データセンターに聞きたいことがあれば質問してください。
- 3 実際の臨床で困ったこと、またはこんなときにどうしたらよいのか。相談事項がありますか。
- 4 プロトコルへの質問などに、委員長に答えてもらいます。



JALSG 代表、幹事の選定方法と経過： 2012.3月現在

- 1 幹事候補者指名委員会を組織する
指名委員会委員の選定方法が運営委員会にて承認 (2011.6.18)
運営委員会にて幹事候補者指名委員会委員を承認 (2011.10.13)
- 2 幹事候補指名委員会が幹事候補者を指名する
地域性、症例数、JALSG への貢献度、社会的影響、次世代への継続性を考慮して選出
- 3 指名された幹事候補者を運営委員会が承認する (2011.12.17)
本人の承諾を得る
- 4 新たに結成された幹事会が (幹事の中から) 代表、副代表を選出する
- 5 新たな代表、副代表を運営委員会が承認する (2012.3.3)
- 6 新幹事会による監査役 (運営委員より) の推薦
- 7 運営委員会による監査役の承認 (2012.3.3)

各施設より新運営委員を選出し、運営委員会にて承認 (2012.6)

2012-2014 JALSG 新幹事

地域、症例数、JALSG への貢献、社会的影響を考慮して選出

地域	候補者名 (敬称略)	所属	地域	候補者名 (敬称略)	所属
1 北海道	今井 陽俊	札幌北楡病院	12 中部	直江 知樹	名古屋大学
東北	—		13 "	大西 一功	浜松医科大学
2 関東	白杵 憲祐	NTT 東日本関東病院	14 関西	松村 到	近畿大学
3 "	藤田 浩之	横浜市立大学	15 "	谷脇 雅史	京都府立医科大学
4 "	薄井 紀子	東京慈恵会医科大学	16 中四国	品川 克至	岡山大学
5 "	竹内 仁	日本大学	17 九州	宮崎 泰司	長崎大学
6 "	宮脇 修一	都立大塚病院	18 "	麻生 範雄	熊本大学
7 "	小林 幸夫	国立がん研究センター			
8 中部	宮村 耕一	名古屋第一赤十字病院	監査役 (会計・業務監査)		
9 "	清井 仁	名古屋大学	1 佐倉 徹	済生会前橋病院	
10 "	恵美 宣彦	藤田保健衛生大学	2 竹下 明裕	浜松医科大学	
11 "	大竹 茂樹	金沢大学	3 宮本 敏浩	九州大学	

施設紹介

藤田保健衛生大学



大学病院を中心に、医学部、医療科学部（臨床検査学科、看護学科、放射線学科、リハビリテーション学科、臨床工学科、医療経営情報学科）からなる総合医療系大学です。

藤田保健衛生大学は、西は名古屋市内、東は豊橋市まで、北は愛知県東郷町、南は知多半島周辺を診療範囲として



としています。ベッド数は約 1500 床で 1 日の外来者数は 2000 人あまりでしょうか。

私は、平成 20 年より主任教授をしておりますが、リンパ腫に関しては、岡本教授がまとめています。

准教授として、PhALL210R の委員長をした水田先生や、細胞療法の専門家である赤塚先生が所属しています。当血液内科は若手の医師が少ないので、研修を希望している先生がいらっしゃれば紹介していただければと思います。



名古屋市郊外の大学でゆったり臨床、研究をやるのも楽しいと思います。



当院の JALSG 運営委員は、都築講師が長く務めていましたが、平成 24 年からは、柳田講師に代わっております。都築講師は本学を平成 1 年に卒業で、臨床の番頭として長く血液内科を支えておりました。

新しく運営委員になる柳田講師は、平成 7 年卒で JALSG ALL202 のプロトコル委員長をやっていたことでもありますので、今後の働きを期待しています。

平成 23 年 12 月に無菌室改修が終了して、最新の無菌室が 11 室となりました。今後は移植数を増やすことができると考えております。病院の裏には濁ヶ池が広がっており、近くには古戦場跡の桶狭間があります。名古屋市の東側の郊外になりますが、機会があればぜひお寄りになってください。

年間新入院患者数

- ・急性骨髄性白血病 (AML) 15-25
- ・急性前骨髄性白血病 (APL) 2-4
- ・急性リンパ性白血病 4-8
- ・骨髄異形成症候群 5-10
- ・骨髄腫 5-10
- ・悪性リンパ腫 60-80

■ 1 日平均入院患者数 50~70 名

■ 1 日平均外来患者数 40~60 名

会議予定

- 2012/6/23 (土) A.M 平成 24 年度第 1 回直江班・小林班合同班会議
於：東京国際フォーラム

JALSG25 周年記念国際シンポジウムについて

今年、JALSG は設立 25 周年を迎えます。それを記念して JALSG25 周年記念国際シンポジウムを開催することになりました。

場所：東京国際フォーラム 日時：6月23日(土)午後、24日(日)午前 参加費：3000円

予定の海外演者はそれぞれ大変ご高名な方であり、白血病についてまとまった話を伺えるとても貴重な機会です。どうぞ奮ってご参加ください。なお、23日シンポジウムプログラム終了後に懇親会を予定しています(参加費 5000円)。合わせてご参加をお待ちしています。

6月23日 予定スケジュール

開始時間	発表者
14:00	開会の挨拶 直江 知樹先生
14:05	CML 研究 Delphine Rea 先生 (仏国) 質問
14:50	CML 研究 宮村 耕一先生
15:05	CML 研究 松村 到先生
15:20	CML 総合討議
15:35	休憩
16:00	ALL 研究 Françoise Huguet 先生 質問
16:45	ALL 研究 Seok Lee 先生 (韓国)
17:05	ALL 研究 Young-Don Joo 先生 (韓国)
17:25	ALL 研究 今井 陽俊先生
17:40	ALL 研究 早川 文彦先生
17:55	ALL 総合討議
18:10	終了

6月24日 予定スケジュール

開始時間	発表者
9:00	AML 研究 Arnold Gancer 先生 (独国)
9:40	AML 研究 Bruno Medeiros 先生 (米国)
10:20	質問
10:25	AML 研究 清井 仁先生
10:45	AML 総合討議
11:00	休憩
11:15	APL 研究 Sai-Juan Chen 先生 (中国)
11:55	APL 研究 品川 克至先生
12:15	APL 総合討議
12:30	閉会のことば 宮崎 泰司先生
12:35	閉会

編集後記

JALSG ニュースレターを発刊することになり、今までとは違った切り口で情報を提供したいと思っています。各施設の運営委員の先生にはメールで原稿を依頼することもあるかと思えます。協力をお願いします。

教育・広報委員長 恵美宣彦

成人白血病治療共同研究グループ (JALSG)

事務局：〒431-3192 浜松市東区半田山 1-20-1 TEL/FAX:053-433-4993 mail:jalsgsc@hama-med.ac.jp

発行責任者：直江知樹 (代表)

編集責任：教育・広報委員会

発行日：2012・4・1